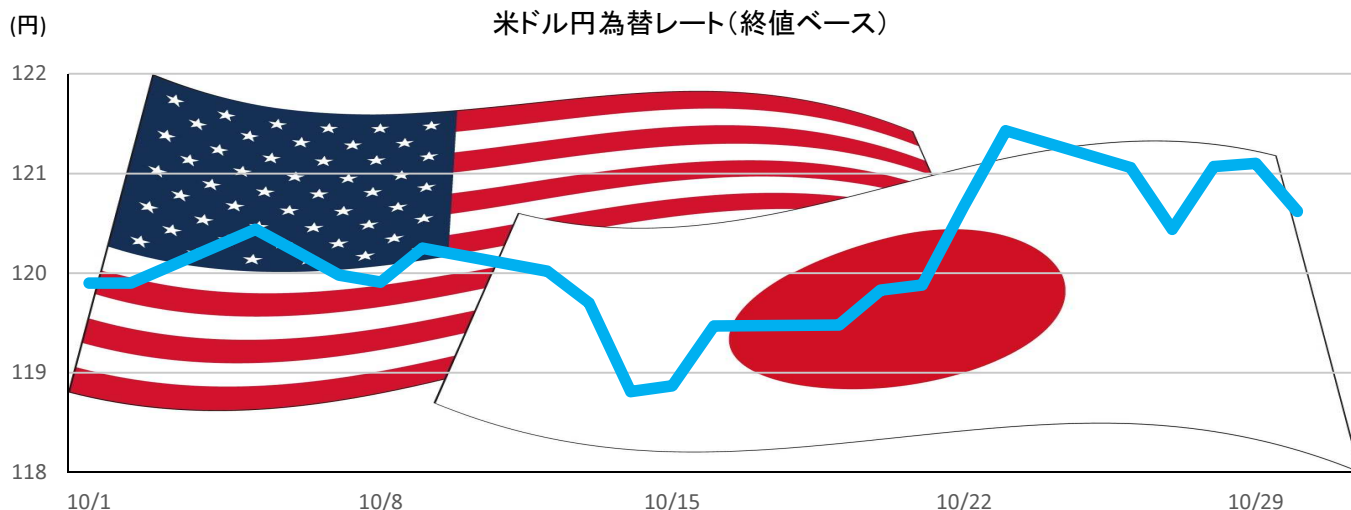


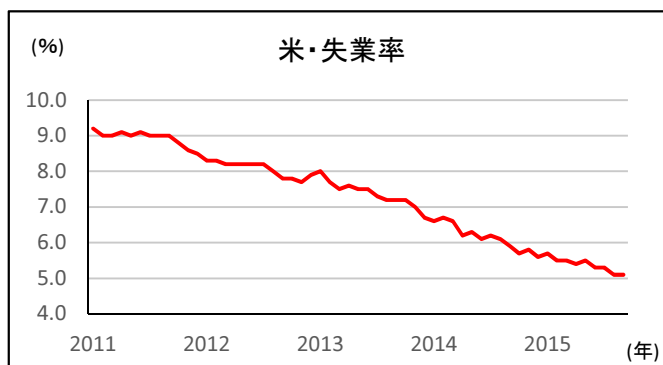
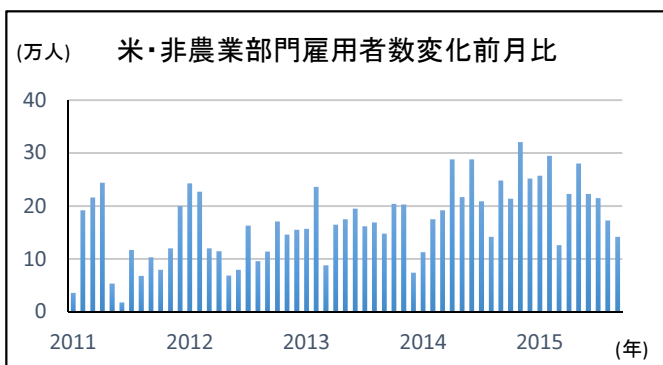
## MARKET REVIEW

**先月の振り返り：**10月のドル円相場は、118円前半～121円後半のレンジで推移した。10月の米FOMC 声明では、労働市場の改善度合いこそ、やや慎重化しつつも、12月会合で利上げを検討することを明記。この声明を受け、ドル円は121円台で取引される場面がみられた。一方、日銀は、追加緩和を見送った。発表直後、ドル円は一時的に急落したものの、その後は121円台まで急反発する荒い値動きとなった。FOMCの声明を受け、追加緩和というカードを温存したのだろうか？黒田総裁は、記者会見でもこれまで同様に強気の姿勢を維持していた。



## EXTRA VISION

**今後の展開：**今後のドル円相場は、米の12月利上げ実施の有無が最大の焦点となり、関連する経済指標や要人発言に一喜一憂する展開となってくるであろう。先月の米FOMC声明では、グローバルな経済・金融動向のリスクに関する記述が削除されており、9月利上げを見送った原因のひとつである世界的な株安局面は解消されたとも言える。残りの問題は、米FOMC声明文で下方修正されていた雇用面で、そこが改善されれば、12月利上げ実施の可能性が高まる。その意味で11月、12月の雇用統計は、いつにも増して注目したいところである。ただ、雇用面である労働市場に期待されるのは、「あと少しの改善」という控え目なものではなく、「物価が上昇すると確信を持てるほどの強い改善」と言えよう。それを持って初めて、12月利上げが現実的となる。



(資料)米労働統計局よりフィナンシャルヴィレッジプレゼンス作成